

創造戦記ガンダム
IMAGINE

過多流

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2051年、「ガン普拉バトルシミュレーター」がリリースしてから3年がたち、大きなブームを見せている。それは思い思いのガン普拉を作り、シミュレーターでバトルさせるゲーム性はガンダムファンやモデラーたちのあこがれを実現させたものだった。そのβテストに最年少で参加した「箕輪シユウ（みのわ しゅう）」もそのプレイヤーの一人で、愛機「ウイングガンダム」とともに戦場を駆ける。

*この作品は機動戦士ガンダムシリーズをもとにガン普拉に焦点を当てた二次創作です。オリ主、多数のオリキャラが登場します。苦手な方は読まないことお勧めです。

ガンダムシリーズ本編のパロディやネタが多数登場します。がばがばな解釈で用いられている場合は優しく見守っていただけだと嬉しいですね。

*Twitterで読者様参加型企画を開催する予定です。その時になったら小説およびツイートで告知するので、Twitterのフォローもよろしく願いますね。(プロフィールにリンクを貼ります)

目次

序章	少年の駆ける流星	
序章	少年の駆ける流星①	1
序章	少年の駆ける流星②	6

序章 少年の駆ける流星

序章 少年の駆る流星①

「みなさーん!? お待ちかね、ガン普拉バトルシユミレーターβテスト会へようこそ!
この前人未到の領域で、君は生き延びることができてるのかー!?」

ナビゲーターらしき女性のアナウンスに、その広い会場は盛り上がりを見せていた。
ガン普拉バトルシユミレーター。それはモビルスーツのコックピットを模して作られた球体の中で、自身のガンプラを操縦して戦うバトルアクションゲームである。2048年5月からゲームセンターでリリースされる予定であり、そのβテスト会が行われるのがこの真冬の日だ。モデラーたちはこぞってこの会に応募して、その倍率は50を超えたとも言われている。その厳しい抽選の中で若干13歳で通り、最年少参加者となった中学生がいた。その少年、「箕輪シユウ」は一步一步と周りを見渡しながらしユミレーターへと入る。周囲もそれぞれの関係者と野次馬とで溢れかえっていた。

外のざわつきとは裏腹の、閉じ込められた暗い空間に緑色の文字が映る。人の手を待たないで先々と初期設定と見られるものは進んでいく。「箕輪シユウ」と表示された時、コックピットの中で少年は肩の荷が降りたように吐息を漏らした。「XXXXXXXX-01

W」そう形式番号が表示された。正面に球体が浮かび上がり、それが5つの局面の軌跡で囲われた時、3方向からなるパネルには艦内の発散シークエンスが、そして正面には青い地球が広がっていた。テレビで見慣れた光景に安心して背を持たれていた彼は、身を乗り出してそわそわとしている。そして恒例のコールを待つ。

「進路クリア 発進、どうぞ。」

「箕輪シュウ、ウイングガンダムで行きますー！」

恒例行事のアナウンスと共にシートにGがかかる。バード状態で発進したとはいえ、あまりのスピードにシュウは思わず言葉にもならない声をあげる。密閉され屋コックピットという空間に加え、周りの声や物音以上に耳にくるきしみや椅子の揺れは少年には刺激が強すぎた。だが、その刺激はむしろ彼の憧れを体現していたともいえる。

「本当に、出撃したんだな…。」

一人の少年は、汗ばんだ手で操縦桿を握りしめ、呟いた。

宇宙空間へと放り出されたウイングガンダムはただ彷徨うしかできなかつた。変形こそオートで行われたものの、そこからは手動で操作しなければならぬ。3つの画面には移動や射撃等の操作方法が解説されていたが、13歳の少年にはすぐに理解できる

内容ではなかった。操作方法の長い解説の後、

「敵機出現、直ちに撃墜してください。」

突然オペレーターによる状況に反し落ち着いたアナウンスのあと、レーダーに赤いマーカーが表示された。

「MS-06F」ザクⅡF型が、シユウのウイングガンダムの方へと移動してくる。そしてマシンガンを構えた。シユウもそれが見えないわけではなかった。とにかく操作がおぼつかない様子であわてて機体を旋回させる。発射された弾丸がウイングガンダムの左腕をかすめた。回避は全く間に合わなかった。シユウは慌てて機体耐久値の表示を確認する。「99%」その表示に安心したのか彼に反撃の勇気を出てきていた。

「武器は、どれだ……ビームサーベルがある！」

武装欄からビームサーベルを選び、シールドから抜き取った。そして銃弾のかすめた方向へと斬りかかる。

一瞬でアニメのそのような勢いでザクの右腕を斬りおとしていた。抵抗する手段を失ったザクにシユウはウイングガンダムのマシンキャノンで追い打ちをかける。圧倒的な戦闘結果だった。更に2機、遅れてザクが襲い掛かる。バズーカを構えた2機はかわるがわるに銃弾を撃ち込んだ。

「さっすきの、オレじゃない！」

シユウはウイングガンダムのスラスタを吹かしてすべて回避して、1機のザクに肉薄する。その勢いでザクに体当たりを仕掛けるかのように肉薄し、ビームサーベルを抜く段階で仕留めた。残りの1機はウイングガンダムにヒートホークで奇襲をかける。もちろん、攻撃は命中し、翼部分に痕ができた。コックピットにも振動が伝わる。しかしシユウは強気を保っていた。機体を大きく旋回させ、ザクの正面を向く。そして持っていたビームサーベルで突撃し、その勢いでザクのコックピットを貫いた。戦闘終了の文字と画面には再び作りこまれた宇宙空間と青い地球が映る。シユウは初めての戦果に珍しく大きな笑みを浮かべ、シユミレートが終了するのをただ、待っていた。

このβテストから約4か月後、ガンプラバトルシユミレーターはゲームセンターを中心に日本全国で正式に稼働した。あれから3年がたち、ガンプラバトルは大きく普及しプレーヤーの人口も増加、e-sportsの種目としても認められるほどになっている。多彩なバトルモードや、ガンプラの自由さは従来のモデラーの在り方や価値観を大きく変革するほどになっていた。

もちろん、「箕輪シユウ」この男も例外じゃない。

「再びこの場所でガンプラバトルができるなんてなあ、思ってもいなかった。」

愛機となったウイングガンダムをケースにしまい、ゲーセンへ向かう。その後ろ姿はあのβテストの時とは別ものとも思える存在であることを示していた。

序章 少年の駆る流星②

ゲームセンターオオナミ。日本全国に存在する大手のガンプラバトル専門のゲームセンターである。その本店、目黒店はほかの地方店とは違い、設置台数や階層はどの店よりも多い。また、その近辺は模型店激戦区となつてゐるためか、プレーヤーにとつては聖地であり、地方勢からのあこがれの対象だつた。もちろん、引つ越してきた箕輪シユウも例外ではない。

「オオナミの本店は大きいな…まさかここに來れるなんて。」

晴れ渡つた空にそびえたつビル、そして看板の「ゲームセンターオオナミ」の文字。彼の地元、新潟にもオオナミはあつたが規模の差は歴然だつた。人生初、若干16歳にしてプレーヤーの聖地に來ることができた感動は何にも代えがたいのであろう、10分ほどただ眺めていた。外からでも、中の照明が見え、アナウンスとBGMが聞こえてきていた。

自動ドアに加えて空気殺菌装置をくぐり、オオナミの中へ入る。若干暗く、一面が青い中、上の階へ続くレッドカーペットが存在感を示す。周囲のモニターには昨今のガン

プラバトルのリプレイはもちろん、シミュレーターやガンプラのPVが流れている。ゲームセンター特有のベース重めのサウンドは、シユウにとつても慣れた存在だった。

1階はガンプラバトルの新規登録窓口やバトルの準備ブース、ガンプラの性能計測機が設置されている。このガンプラバトルにおいては、プレーヤー自身の操縦技術ももちろんだが、機体の性能、すなわちガンプラの出来栄が大きく強さにかかわっている。律儀なことにそれぞれの部位、機体ごとで性能の平均値が出されており、それを満たしているか満たしていないかは、初心者モデラーにとつては重要なステータスであり、自信につながる案件となる。もちろん、ガンプラバトル中、外のモニターには機体のパーツごとのパラメーターは表示されるが、当のプレーヤーは見ることでできない。そこで、この性能計測機でパラメーターを確認することが重要になってくる。これは市販のガンプラのパーツだけでなく、改造パーツすなわちビルダーズパーツにも適用されるため、新しくガンプラを作ったときはこの計測にかけるのがセオリーとなっている。

初心者なのだろうか、計測にかけた後なのか声にならないような悲痛な声や、まるで勝負に勝ったかのような歓声が聞こえてくる。彼らにとつても出来栄を測るのは一世一代な部分もあるのだろう。シユウはとにかくバトルをしようと、耳や目に新しく入ってくるものを処理する以上に、バトルのできる上の階へ急いだ。同じように続く視界がだんだん違っていくように感じられた。

「では、03番のポッドに入ってガンプラをセットして下さい。」

女性係員のサービスのこもった誘導のもとに、シユウはガンプラをセットして出撃準備をする。彼はもう3年はガンプラバトルをやつてきているのでこのあたりの操作は慣れたかのような手つきで進めていく。戦闘形式も「1対1マッチングバトル」を選択した。ガンプラバトルの中でも最もスタンダードなルールであり、プレイヤー1人ずつ2人がマッチングして、マップの両端どうしからCPUを倒しながら出会い、1対1の勝負を決める形式だ。倒したCPUの分のスコアもオオナミや近隣の模型店のポイントカードに蓄積されるため、シユウをはじめとする多くのプレイヤーに好まれた、オードックスなものになっている。

ウイングガンダムデータが表示される。そしてシユウ自身のプレイヤー記録が処理されて起動準備が進んだ。3つの画面にはリニアカタパルトが表示される。正面のハッチが開いた。青色の地球が出迎える。そしてその地球は徐々に近くなつていった。「重力下の戦闘ですが、気を付けて！発進、どうぞ。」

大気圏突入から再現されていた。放り出される感覚やGは相変わらずベルトをシユウの体に食い込ませる。高度計器の値が変わる演出や、周囲が赤くなつていくことから、その様子はすぐに感じ取ることができていた。

「まるでオペレーション・メテオだ。」

自動で降下していくなか、シユウはひとり呟いた。

重力下だからといって、何か直接バトルに影響するわけではない。パラメーターの補正はほとんどかからないからだ。だが、プレーヤーにとつては宇宙が地球かというのは大きく関わってくる。それは、シユウにとつても同義だった。密林死線。とでも言えるぐらい広がるジャングル地帯はジャブローをも思い起こさせるほど深いものだった。

「視界やレーダーには問題ないんだな……」

シユウは苦笑しながら計器を観測する。レーダー反応4、どれも「OZ-06MS」リーオーだとわかった。レーダー反応があるというのと相当近くに敵がいると判断できる。それはプレーヤーには常識だ。

「レーダーの位置からして潜伏してるな!？」

シユウは密林の中からマシンキャノンで先制攻撃を仕掛ける。全弾命中して、1機撃破することができた。所詮はCOM、リーオーだから補正で固くなるなんてことはない。もう1機も目視で確認できるほど近くにいた。先制攻撃を受けたのは1機だけであり、残りはむしろ、ウイングガンダムの位置を把握することができている。マシンガンの銃弾が上腕部に命中した。シユウも不意打ちには驚いたが逆に3機全ての位置を

正確に把握できた。するとやることは一つ。密林から一気に上昇し、バスターライフルを構えた。照準を密集した3機の中心に定める。

「障害を、取り除く。」

流石のシユウもノリノリのシチュエーションである。COM相手からか尚更、原作のアニメパロディをかましたくなつていく。バスターライフルは3機ともに命中したのか、その後その3機を見ることはなかった。

密林は続く。一向に同じ景色、同じ戦闘には流石のシユウも飽き飽きしていた。だが、その余裕はすぐに崩されることになる。

「噂のβ最年少参加者つてのはお前か。ほう、グランゾンじゃないのだな。面白いヤツだ。」

ジェリドを彷彿とさせる声の方を確認する。そこには、見たこともないMSが立ちほだかっていた。AGEのガフランを彷彿とさせるデザインに、まるで某合衆国のような鮮やかな青と赤のカラーリング。シユウちは極め付けには肩の嫌らしいほどのピンク色でメタル加工された肩部分は、昭和のイメージする不良まさにそのものに映っていた。

「オオナミ本店で覇権を取ろうものなら、俺を倒してみろっ！」

先程からの挑発に、シユウは我慢の限界以前に彼のことを面倒くさくなつていき、早

くバトルを終わらせたかった。

「ジェリド・メサの焼き直しみたいな奴め、女の名前くらい言ってみろ。」

そう、挑発で返せばいい。それで相手が仕掛けてくれればシユウにとつては万々歳なのだ。案の定、声にならない声を上げてすぐに不明機は腕部ビームガンでシユウのウイングガンダムに仕掛けてきた。

待つてました、と言わんばかりにその攻撃を距離をとつて回避する。そのままビームサーベルを抜き、反転攻勢をかけようと突撃をかける。

格闘戦に切り替えるなら、ラグがあるはずだ。そう思っていた。

「甘いな……いつは射撃と格闘は一体なんだよっ！」

シユウの痛撃となるはずの攻撃は、切り払われてしまった。こうなつてしまうと切り替えの早い方が先頭は断然有利になる。そのあとも不明機の攻撃は続く。シユウのウイングガンダムは武器も少ない。防戦一方にならざるを得なかった。

「もらったー！」

二刀流の不明機から繰り出される斬撃を、防ぎ切ることはできなかつた。ガードを破られてしまえばあとはもう、攻撃を受けるしかなくなる。不明機のメインカメラが発光する。それが近くに見えていた。まずい、ただそれをシユウは感じていた。